

農業関係高校の魅力と農業クラブの活動を、 小中学生を含めた地域に発信するにはどのよ うな方法があるか。

クラブ員代表者会議 北海道ブロック東北道連盟 北海道中標津農業高等学校

食品ビジネス科	3年	佐々木 鈴 華
食品ビジネス科	3年	山 崎 ま い
生産技術科	2年	立 石 晋太郎
食品ビジネス科	2年	村 上 さくら

【概要説明 北海道農業及び北海道中標津農業高等学校（農業クラブ）について】

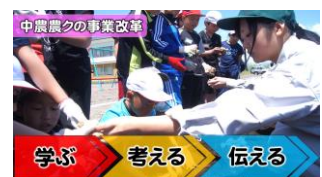
私たちの住む北海道は、三方を太平洋、日本海、オホーツク海に囲まれ、農産物や海産物、林産物といった天然資源が豊富であることから、日本の食糧基地として大きな役割を担っています。そんな北海道における1農業経営体あたりの農地面積は他府県の約15倍と、大規模で専門的な農業経営が特徴です。

このように北海道農業は、広大な大地で行われているために、気象条件や土壌性質など地域によって大きく異なります。そのため、それぞれの地域に合った農業技術の習得が必要とされることから、日本学校農業クラブ北海道連盟では、大きく3つの地域連盟に分かれ、合計29校が加盟しています。

私たちの学び舎、北海道中標津農業高等学校は、札幌市から約400キロ、ここ山形県からは約1,000km離れている、日本最東端の単置型農業高校です。学科編成は、農畜産物の飼育・花き栽培などを中心に学ぶ生産技術科と、食品加工や流通を学ぶ食品ビジネス科の2間口、全校生徒96名が学ぶ小さな町立学校です。

そんな本校は、近年の少子化と北海道農業衰退(北海道農政事務所より引用)のあおりを受け、生徒数が減少。平成2年をピークに在籍数は減少を続け、平成28年には在籍数77名、また入学者数は2学科合わせて14名という過去最低の生徒数となりました。そんな中、中農農クでは「クラブ員の資質を向上させ、クラブ員の活動や成果を地域へ広く発信していく環境づくり」が重要であると考えました。

そもそも農業高校の使命は、地域に農業従事者・技術者を輩出するとともに、農業の持つ魅力を次世代へ発信・伝承することが重要であると考えます。そのために、私達クラブ員が持つ資質を向上させ、地域のリーダーとしてまち全体を先導していく必要があると考えた私達は、クラブ員が地域と密接に関わっていくなかで「学び、考え、伝えていく」農業ク



ラブ活動の実践に重点を置いて活動を進めることを決定。よって、活動テーマを「『学ぶ・伝える・まち創り』～地域と歩む中農農ク～」としました。それでは私たちの実践内容を報告します。



【北海道中標津農業高等学校・農業クラブ実践報告】

実践1 (科学性) 学び方改革 ～クラブ員の資質向上を目指す～

まず、クラブ員の資質を高める取組として三大大行事に注目。これまでの事業運営をもとに「年間を見通した事業改革」を実践しました。クラブ員への効果が大きいと判断した取組は継続しながら、各行事でクラブ員が必要とするニーズに合わせた学び方改革を実践しました。



意見発表大会では、新入生に対する通信を発行。また、原稿作成に悩むクラブ員が多いことを受け、意見のまとめ方や審査基準の解説を加えたシートを作成し、体系的に意見をまとめられるよう全クラブ員に配布しました。さらに、惜しくも選ばれなかったクラブ員に対しては敗者復活制度を継続したことにより、2名が入賞し、上位大会へ出場する結果となりました。



技術競技大会は、昨年度発足した専門性向上プロジェクト「G-NAP」を継続。30年度は全校の1/3を占める28名から応募があり、学科ごとに学習会を行いました。また、朝学習には執行部が作成した鑑定問題集「G-NAPからの挑戦状」を全校で挑戦。その結果、年間を通した朝学習テストでは高得点が続き、校内大会の平均点は全競技で上昇。全道大会では中農開校以来最多の8名が入賞したことで、多くのクラブ員が全国大会へ出場しました。



実績発表大会は全研究班が全道大会出場を果たすなどクラブ員の意欲が高い行事です。そこで今年度は地域産業への理解を深めるため、農水省とタイアップした「酪農シンポジウム」へ参加。講演では、基幹産業を支える講師の方々から地域の農業情勢や課題について学習を深めました。さらに、クラブ員と講師陣で担い手確保や農業の発展をテーマにディスカッションを開催。地域課題解決への提案や検討など活発な意見交換が行われました。



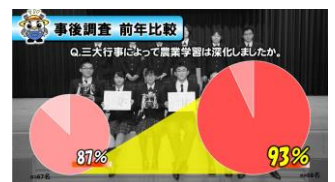
これらの活動からクラブ員に「三大大行事によって農業学習が深化しましたか」の問いには93%が農業学習の理解が深められたと回答。学び方改革の実践により、地域を支えるリーダーとしての資質を向上させることができました。



実践2 (指導性) 地域改革 ～クラブ員がリーダーとして

新たな中標津を創造する～

年度始総会では、農ク会長からスローガンが提案され、全クラブ員で「地域のリーダーを目指す」という意思を統一。すると、各学科からはより地域に密着したプロジェクト活動が提案されました。



生産技術科では「中標津をもっと広めたい」という思いから、札幌市で行われたガーデニング甲子園に出場。まちの雄大な地域景観と主産業「酪農」を表現した作品が、北海道新聞社賞を受賞し、道東地域初の5年連続入賞を達成しました。



また、主産業酪農について学ぶ動物活用研究班は、日本でも事例が少なく登録が難しい乳牛のGAP認証取得に挑戦。地域のGAP取組農場や東京大学教授と連携した経営改善に取り組み、全国の高校で初となるGAPチャレンジシステム認定農場として登録されました。



食品ビジネス科では、幼少中学校と連携した「計根別食育学校」が14年目に突入。今年度より地域の小中一貫校「計根別学園」との連携も強化し、幼稚園から中学生まで全学年を対象とした体験プログラムが実現しました。各研究班がそれぞれの分野から横断的な食農一貫教育の展開を続け、農水省発刊「食育白書」に先進的な事例として掲載されました。また、農産加工班からは小学生がアイデアを出した羊羹パンが誕生。地域素材をふんだんに使ったこの作品はパン甲子園で地域賞を受賞。地域とともに創りあげた活動は外部から高い評価を受けることができました。これら地域へ開かれた農業クラブ活動を継続したことにより、食育学校を卒業後は農業高校へ進学し、教える側として活躍するといった人材の好循環も確立されつつあります。



また、クラブ員も97%が自ら積極的に行動できたと実感。日々高まる私たちの想いは郷土を担う自信につながり、更なる地域振興へとつながるでしょう。



実践3 (社会性) 伝え方改革 ～クラブ員の熱い想いを地域へ

情報発信の強化～

私たちが放送を行っているラジオ番組「Hello, 中農 Radio」は4周年に突入。AMラジオの届かない中標津町唯一の情報源という強みを活かし、もっと町民に愛される双方型のラジオ番組に進化しよう!と情報発信を強化するための改革に着手しました。



昨年度まで行っていた各研究班の研究成果や新製品の紹介のほかに、海外研修や全国大会の様子を衛星中継で放送し、クラブ員の活動成果を報告するなど「クラブ員の今」を発信する番組構成へ変更。また、クラブ員だけでなく、各研究班と関わりの深い地域の方々をゲストに招いた放送を展開したことにより「中農が地域へ発信する番組」から「中農と地域が発信するラジオ番組」に進化しました。その結果、番組のフェイスブックでの支援者は増加し、寄せられる意見数も増加。ラジオ放送がプロジェクト活動の発展と地域とのつながりを強めるツールとなっていることを確認しました。また、クラブ員の成果発信の場でもある三大行事の開催日についてもラジオで放送すると、校内実績発表大会当日は



約 80 名の町民が来場する結果となり、高校生ならではの地域課題解決方法の提案とその成果を町民へ広く発信することができました。

クラブ員は 91%が「ラジオ放送は活動成果の場に最適」と答え、また、「自分たちの成果が発信されていると思いますか」の問いには 94%のクラブ員が発信されていると回答。

したがって、ラジオ放送の見直しによる伝え方改革によって地域への発信力が拡大し、クラブ員のもつ中標津町への熱い想いをまち全体へ発信することができました。

以上の活動から成果をまとめると

- 1 クラブ員のニーズに沿った行事改革を行ったことにより、クラブ員の資質を向上させることができた
 - 2 クラブ員が積極的に行動することにより、新たなまちを創造する地域改革へとつなげることができた
 - 3 ラジオ番組を通じた伝え方改革の実践により、情報発信が強化され町民とのコミュニケーションツールが確立できた
- の 3 点が挙げられます。

今後はクラブ員の飛躍を目指し次の 3 点に取り組んでいきます。

最後に私たちの活動を支えてくれた地域の方々に調査を実施。その結果、地域リーダー達成度は 90%。また、クラブ員も 97%が地域のリーダーとしての自覚を持って活動できたと回答。中標津町長 西村 穰さんからは「地域産業に向き合う中農農クの取組は町全体に大きな影響を与えている。新たな中標津を築いていくのは中農です。」といただいたことから、農クとまちの共存共栄を確認しました。

まちの産業を担い、地域とともに歩んでいく農業高校。そして、農業学習を深化させていく農業クラブ活動の可能性は無限大です。農業クラブの活動を地域へ広く発信するためには、私達クラブ員が自らの資質向上に努め、地域課題解決に取り組むこと。そして、私達の活動を地域へ向けて積極的に発信し、中標津町の課題解決に向けて一緒に取り組んで行くことこそが、地域のとのより強固なコミュニティの形成に繋がると考えます。

開校から 70 年の節目を前に、まちのリーダーとして歩み始めた中農農ク。先輩方が築いてきた産業を小中学生を含めた次世代に受け継ぎ、新たなまちを創造する事こそ、中農農クの担う大きな使命です。地域に寄り添い、ともに歩む農業高校の真の姿を目指し、中農農クの挑戦はこれからも続きます。

